

第二次世界大戦前のバンクーバーにおける 日本人ガーディナーの展開

—庭を掃くかな伯耆人—

河原典史

I. はじめに—研究の学術的背景—

19世紀後半の北米大陸では、博覧会でのパビリオンとして日本庭園が注目されはじめていた。それはヨーロッパからアメリカ東海岸、さらに西海岸へと展開した¹⁾。このような日本庭園の萌芽について、筆者はカナダ西部における日本庭園の建造について紹介してきた。

1843年、ハドソン湾会社がビクトリア西方の水路沿いにゴージ公園を開園した。横浜市北方町(現・横浜市中区)出身の岸田伊三郎は、1907年にこの公園でカナダ最初の日本庭園を建造し、その後もビクトリアに3ヶ所の日本庭園を造園した²⁾。バンクーバー沖のボーウェン島には、1912年に佐賀県北茂安町(現・佐賀県みやき町)出身の古賀大吉が日本庭園を造園した³⁾。彼らの経歴だけでなく、筆者は造園の社会・経済的背景、さらに労働力の確保についても検討した⁴⁾。さらに1935年には、前年にビクトリアで客死した新渡戸稲造を記念する日本庭園がブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)に建造された⁵⁾。

第二次世界大戦後の1960年には、新渡戸庭園が再建された⁶⁾。いわゆる新・新渡戸庭園の造園にあたって「ガーデンクラブ」、現在のバンクーバー日系ガーディナーズ協会(以下、協会)が創立された。当時、造園に協力すべく入会した会員は22名で、その多くが戦前からの経験者や彼らの同郷者であった。そのなかで、鳥取県出身者が最多の6名を数えた。最も多くのカナダ移民を輩出した滋賀県出身者はわずか1名、サケ缶詰産業に貢献した和歌山県出身者は皆無であった。この史実は漁業、伐木業や製材業などと異なり、日本人ガーディナー(gardener:庭師)が他の産業・生業とは異なった興味深い移民史を築いてきたことにほかならない。先行研究では曖昧にされてきたガーディナーについて、戦前の庭園業(maintenance:芝刈り)と戦後の造園業(landscape)との区別がされてこなかった。両者の比較検討が不十分なまま、後者に関わる日本庭園、とくに表象やその設計者に目を奪われた日本文化史研究が続けられてきた⁷⁾。つまり、戦後の早期にガーディナーを牽引してきた鳥取県出身者の検討が欠落しているのである。

次に、日本人ガーディナー史⁸⁾をめぐる先行研究の欠落の要因について、その研究方法から検討しよう。戦前にカナダへ渡った日本人の就業をみると、特定の業種に集中する傾向があった。排斥のなか、英語のままならない日本人が就ける職業は限られていた。それは、渡航時期や日本とカナダの政策、そして先駆者の出現とその後の連鎖移住などによるところが大きい。前述のように、漁業には和歌山県出身者が多く、製材業や商業には滋賀県、伐木業や炭鉱業では熊本県の出身者の占める割合が大きかった。この事実については、文化人類学者・新保満⁹⁾や宗教史学者・佐々木敏二¹⁰⁾の一連の研究などで明らかにされてきた。とくに、日本人の活動について実証的な研究の必要性

を説いた佐々木は、当時の日本人名簿¹¹⁾や職業別電話帳¹²⁾を復刻させ、それらを活用したバンクーバーでの日本人商店の実態解明を試みた¹³⁾。同様の方法で、末永國紀は滋賀県出身者の商業活動を考察した¹⁴⁾。しかし、名簿には常設店舗しか記載されていないため、経営者が日本人であっても、そこでの雇用者は不明であった。さらに、非常設店舗の場合には、職種や就業地などは定量的に解明できなかつた。したがって、白人の経営するサケ缶詰工場や製材所などでの日本人の雇用については、不明な点が多かつた¹⁵⁾。つまり、日本人名簿に依拠してきた限り、佐々木や末永においても店舗を持たないガーディナーについては言及できていないのである。

戦後についても、ガーディナーとなる日系二世や帰加二世が多いことを蒲生正男¹⁶⁾や山田千香子¹⁷⁾は報告している。しかし、製材業・漁業界を追われた彼らがガーディナーを選択した(せざるをえなかつた)理由については、「器用で綺麗好き」という日本人(日系人)の特長ばかりが指摘され、その歴史のかつ社会・経済的背景については全く追求されてこなかつた。戦前からの連続性のなかで、日本人が再び同業を選択した要因にまで考察が及んでいないのである¹⁸⁾。

このようなレビューをふまえた本稿の研究方法は、以下の通りである。経年的に発刊されていた住所氏名録である通称*BC Directory*には、街路別に地番毎の居住者とその職業が明記されている¹⁹⁾。日本人については“Japanese”とだけ記されていたり、不正確な“Oriental”や“Chinese”などと誤記されていたりしたが、1930年代以降になるとほぼ正確な氏名が記されるようになる。職業についても、被雇用者の場合には製材所や商店などの事業所名までが記載されている。したがって、先行研究で利用されてきた日本人名簿では把握できなかつた庭園業を主体とするガーディナーについても、“gardener”と記載された日本人を確認することが可能となる。さらに、家屋1棟単位まで描かれた約1,200分の1スケールでの*Fire Insurance Plan*(火災保険図)²⁰⁾との併用から、日本人ガーディナーの居住地について景観復原図を作成し、その地域的展開が検討される。

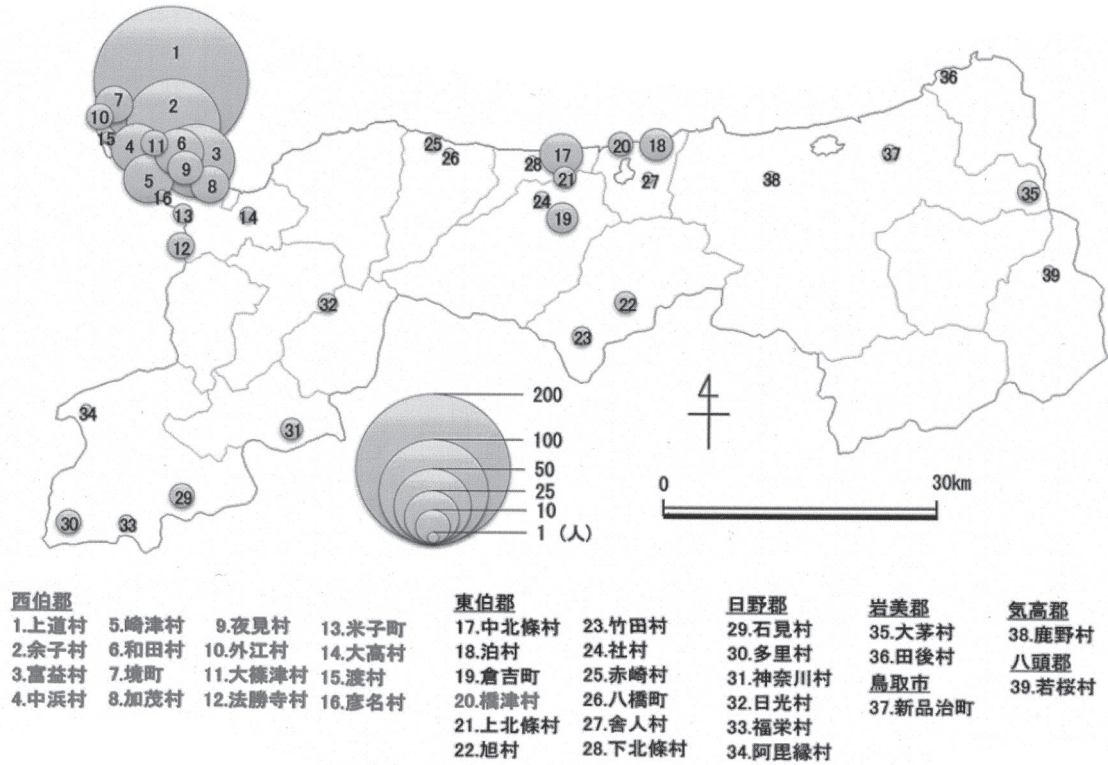
日本人ガーディナーの出身地については、都道府県別の出身地が記されている『加奈陀在留邦人々名録』²¹⁾と『在加奈陀邦人々名録』²²⁾を基礎資料とする。さらに、大字単位の出身地や家族構成までも記されている『加奈陀発展大鑑・附録』²³⁾を併用する。関係者からの聞き取り調査も加えたこれらの歴史地理学アプローチによって、ミクロな空間単位における血縁・地縁関係からの連鎖移住が明らかにされる。

II. カナダへ渡った伯耆人

1 海運業の伝統

大陸日報社編『加奈陀同胞発展史 第三』²⁴⁾によれば、1920年代初期のカナダにおいて最も多かつた日本人は滋賀県出身者である。以下、和歌山・広島・熊本・福岡・鹿児島県出身者が続く。九州出身者の多くは、炭鉱業や鉄道保線業への契約移民として渡加した人々である²⁵⁾。そのなかで、453名を数える鳥取県出身者は、全国12番目にあたる。

前述した『加奈陀同胞発展大鑑・附録』から彼らの出身地を精査すると、鳥取県出身者524人のうち8割強が鳥取県西部の西伯郡出身者で占められている。そのほとんどは、現在の米子市から境港市にかけての弓ヶ浜半島から輩出されている。198名を数える上道村(現・境港市)が最も多く、この周辺地域がカナダ移民の局地的な輩出地であつた(第1図)。一方、鳥取市をはじめとする県東部



第1図 カナダ鳥取県出身者の分布

中山訊四郎 (1922) 『加奈陀同胞発展大鑑 附録』 より作成

からは北海道や満州²⁶⁾、そしてブラジルへの移民が多かった²⁷⁾。そのなかで、東伯郡橋津(現・湯梨浜町)とその周辺からの渡加者もみられる。後述する境港と同様に、北前船の寄港地でもあった当地からは、後に「カナダ製材界のボス」と称される門田勘太郎²⁸⁾がカナダへ渡っているため、その連鎖移住が生じたのであろう。

弓ヶ浜半島からの歴史的な輩出要因は、近世に海運業で栄えた境港と、その周辺の地域性が指摘される。当時の主要な海路として蝦夷・東北地方—大坂を結ぶ西廻航路が設定され、その寄港地として境港は重要であった²⁹⁾。廻船問屋は単なる運送業者ではなく、生産地と消費地との需要と供給を考慮した貿易業者でもあった。境港に錨を下ろす船主や彼らを雇う廻船問屋には、遠く離れた地域の経済状況を読みとる能力が備わっていたのであろう。「海の向こうを知る力」が彼らの出身地で育まれ、その力は近代の海外移住を惹起したのである。

2 海外への飛躍を期する教育者

日野川から運搬された土砂と沿岸流によって形成された砂州からなる弓ヶ浜半島は、近世においても土砂堆積は進み、その幅を広げていった。それにともない新田開発も進み、いわゆる分村が形成された。しかし、砂帯からなる当地では水田耕作は必ずしも好調ではなく、近世後期から近代にかけて綿花が栽培されるようになった。しかし、この工芸作物は市場の景気に左右されやすく、明治期に海外から安価な綿花が輸入されるようになると、当地の農家は困窮を起した³⁰⁾。

このような状況において、渡航の契機を創出した教育者は忘れてはならない。1854(安政1)年に上道村の医家に生れた村上龍は、20歳で境郷校教授方になり、外江小学校や境小学校、さらに弓浜

高等小学校、私立米子高等女学校や日野高等小学校などの校長を歴任した。さらに、私塾・藹然舎あいぜんしゃを起こした彼は多くの有能な人材を世に送り出し、とりわけ海外渡航を勧めたのである³¹⁾。

村上の影響を受けた若者の一人に、足立儀代松がいた。稲岡倉三郎の長男として1867(慶応3)年に上道村に生れた彼は、幼くして鳥取藩下級士族の伯父・足立勝蔵の養子になった。因幡高等小学校(現・久松小学校)の教師をしていた頃、彼は入江金次と山田政蔵の2人からアメリカ大陸の様子を聞き、海外雄飛の夢を膨らませた。教師を辞した足立は英語塾に通い、25才になった1892(明治25)年にカナダへ渡った。3年間滞在した彼は、帰国後に故郷で渡加を勧めてまわったのである(第2図)³²⁾。

前述の村上の影響もあり、弓浜高等小学校は海外渡航を奨励し、足立と親交のあった同校の教師・川尻慶太郎も協力するようになった。そして、1895(明治28)年に足立を団長、川尻を副団長とする14名の移民団が結成され、彼らはカナダへ渡ったのである³³⁾。

Ⅲ. ガーディナーを選択した伯耆人

1 季節的労働者としての日本人ガーディナー

夢を抱いてカナダへ渡った足立らは、その現状に直面した。先住者の滋賀県出身者は製材業や同胞を顧客とする商業で活躍していた。「三尾を制する者はスティーブストンを制す」と称されたように、三尾を中心とする和歌山県出身者は強靱な血縁・地縁関係で、フレーザー川南流河口のスティーブストンを中心にサケ缶詰工場(キャナリー)³⁴⁾で確固たる地位を築いていた。そこで鳥取県出身者は、フレーザー川北流にあったセルチック・キャナリー(第3図)³⁵⁾や、バンクーバー・キャナリーなどの狭小なサケ缶詰工場に従事した。1898年に操業を開始した後者では、三尾以外の和歌山県出身者の6名に続いて、7名の鳥取県と5名の鹿児島県出身者が確認できる³⁶⁾。

このようななか、後発の鳥取県弓ヶ浜半島出身者は新たな生業を模索していた。遠藤敬事編『鳥取懸人同志會畧史』³⁷⁾には、興味深い記述がある(棒線と括弧は筆者)。



第2図 足立儀代松・世似の墓碑
2012年 河原撮影



第3図 鳥取県出身者が従事した
セルチック・キャナリー跡
2012年 河原撮影

【資料】

晩香坡市に於るガーデナー（庭園業）働きの起源も可なり古いもので、一九一二年頃に角梅太郎氏など、毎年秋から春にかけて、各ボツスの下で働いて居たと云ふが、二三年後からは、安田常雄氏なども同様方々で働いたと云ふ。その後追々これを副業として利用する人が殖えて来て、多くの人々が漁閑期には此の方面に働いたものである。中に浜田定榮、北野樽松の諸氏は、帰国するまで本業として就働して居たが、急速なる晩香坡市の発展につれて、更にその需要も増して来たので、一九二二年頃からは全くの専業とする者が漸次に続出して、今日では左の諸氏が熱心に精進して居り、中にはボツスとなり、又独立して営業するものが相当に多くなって行く傾向がある。

この記述からは、通年における芝草の整備だけでなく、むしろサケ缶詰産業の閑散期になる秋から翌春³⁸⁾では、落葉やコケ類の除去などを担うガーディナーの需要があったことがわかる。白人を顧客とするため、ある程度の英語が理解できる先住者が始めたこの生業に、鳥取県出身者は活路を見出したのである。また、漁業ライセンスの問題も看過できない。1907年のバンクーバー暴動を経た翌年のレミュー協定後、日本人は移住を制限された。それにともない、日本人の漁業ライセンスの削減が始まり、サケ缶詰産業に従事する日本人は減少した³⁹⁾。漁業に代わる就業先として、ガーディナーが選ばれたのである。

出身地とカナダでの生業との関係性を端的に表す「江州ソーミル、熊本ヤマ、死ぬよりましかなヘレン獲り」、という俗言がある⁴⁰⁾。製材所で活躍した滋賀県出身者や、炭鉱・伐木業に就くため山奥に居を構えた熊本県出身者、そして、サケやニシンなどの漁獲に携わった和歌山県出身者など、他県出身者の後塵を拝した彼らは、やがてガーディナーを本業とすることが多くなったのである。この俗言に、ガーディナーを生業として白人邸宅の芝や苔を刈り取り、それを掃いていた鳥取県西部出身者の活躍について、「庭を掃くかな^{ほうき}伯耆人」と付け加えたい⁴¹⁾。

2 先駆者・角知道の軌跡

戦前・戦後を通じて、日本人ガーディナーとして活躍した角知道は忘れてはならない。彼は、1908（明治41）年に鳥取県西伯郡和田村（現・米子市）に生まれた。1900（明治33）年に渡加した父・利顕は、後述のように菓子職人を経て雑貨商を営むようになった。1907（明治40）年には利顕の呼び寄せで、祖父・虎松が渡加した。1921（大正10）年、小学校を卒業した知道は、大阪の製薬会社へ勤めるとともに夜間の工業学校へ就学した。翌年に大阪の百貨店に転職した彼も、1926（大正15）年にカナダへ渡ったのである⁴²⁾。渡加当初に製材会社へ勤めた角は、同郷者が活路を広めていた庭園業に就いた。やがて、本格的にガーディナーを生業とするため1931（昭和6）年に一時帰国した彼は、大阪府池田町（現・池田市）の造園会社で学んだ。1935（昭和10）年、再渡加した角はウエスト・バンクーバーで日本からの植木輸入業を営み、1941（昭和16）年にはノース・バンクーバーのキャピラノ溪谷付近に転じた（第1表）。後述するように、日本人ガーディナーはパウエル地区ではなく、後背地に白人住宅の広がるキツラノ地区やフェアビュー地区というバンクーバー縁辺部に居住することが多かった。しかし、角がキツラノ地区に居を構えたのは、日本庭園に不可欠な石材を入手するためであった。白人邸宅の庭の手入れ（maintenance）をする庭園業だけでなく、大阪で造園業（landscape）を学んだ角は石材の活用に注目し、他の日本人ガーディナーとは異なる居住地を選んだのである。

第1表 角・矢倉家の職業と居住地

年	Name	氏名	住所	配偶者	職業	出身地	備考
1921	SUMI T		1677 W.2nd.		菓子製造業		利顕？虎松？
1926	SUMI T		1642 W.2nd.		雑貨店		同所に利顕・知道・武嘉・芳松・博愛（職不明）
1931	SUMI T		1642 W.2nd.		雑貨店		利顕？
1936	SUMI T		1642 W.2nd.		製材業		R&H Sawmill
	SUMI Isai		1856 W.2nd.		ガーディナー		伊勢松？
1941	SUMI Yoshimatsu	角 芳松	1606 W.2nd.	Matsu	ガーディナー		
	SUMI Shouhei		1606 W.2nd.		ガーディナー・ 下宿業		
	SUMI Hanako		1606 W.2nd.		下宿業		
	SUMI Toshiaki	角 利顕	1642 W.2nd.	Oiso	雑貨店	和田村	
	SUMI Harry	角 博愛	1642 W.2nd.		下宿業	中濱村小篠津	
	SUMI Isematsu	角 伊勢松	1907 W.4th.	Katuyo	ガーディナー	崎津村大崎	
	SUMI Katuyo		1907 W.4th.		裁縫業		角 伊勢松の妻
	SUMI T	角 知道	509 Keith W.V.	Sakae	ガーディナー	和田村	栄枝：矢倉長寿の妹
1926		矢倉 幸利	1642 W.2nd.		不明	崎津村大崎	
1936	YAKURA Y	矢倉 幸利	1737 W.2nd.	Cheyoko	ガーディナー	崎津村大崎	
1941	YAKURA Yukitoshi	矢倉 幸利	1737 W.2nd.	Choko	ガーディナー	崎津村大崎	
	YAKURA C	矢倉 長寿	1907 W.4th.	Shizue	ガーディナー		

注) 出身地はすべて鳥取県西伯郡

B.C.Directory, 1921・1931・1936・1941. *The ABC Lumber Trade Directory and Year Book* 1939.
 中山訊四郎編『加奈陀同胞発展大鑑附録』、1922。吉田龍一編『加奈陀在留邦人々名録』、1926。
 大陸日報社編『在加奈陀邦人々名録』、1941。

知道をめぐる角家の渡加歴と、その後の活動は第1表にまとめられる。BC Directory に角家が初出するのは、Sumi T、すなわち利顕がキツラノ地区で菓子製造業（confectionery）を営んでいた1921年である。彼については、1926・1931年にも雑貨店（grocery）として記され、そこには角一族が同居していたようである。1926年には、1642 W.2nd（西2番街1642）にSumi Tとともに矢倉幸利の名前も記されていることから、すでにキツラノ地区には同郷者が集住を始めていたようである。さらに1936年には“gardener”の記載が初出するので、前述した漁業ライセンスの削減から、鳥取県出身者では庭園業の専門化が進んだと思われる。

1942年、太平洋戦争の勃発による日本人の強制移動のため、角はタシメ、ローズマリーやニューデンバー⁴³⁾などの内陸部へ転じた。1946年にモンリオールにて造園業を再開した彼は、1954年にはバンクーバーへ戻って同業を営んだだけでなく、盆栽同好会を創設し、広く日本文化を紹介した⁴⁴⁾。また角は公共機関だけではなく、個人の日本庭園も造園した。それらはバンクーバー、レベルストック、ポープやニューウエストミンスターなどのブリティッシュ・コロンビア州だけでなく、サスカチュワン州やアルバータ州にも及んだ。1986年に開催されたバンクーバー万国博覧会における日本パビリオンの日本庭園をはじめ、多くの日本庭園を造った彼は、翌年に勲六等瑞宝章を叙勲した⁴⁵⁾。

IV. 日本人ガーディナーの集住

第2表は、1938年のカナダ各地における日本人居住者数とその就業種である。分類が難しい「一般労働」を除けば、BC州で最も多かった就業は漁業であり、それに就いた者の約3割がステューブストンに居住していた。続いて製材業と農業への従事者が多く、前者はバンクーバー、後者ではイチゴ栽培を中心とするフレザー川流域が活躍の場であった。商業がさらに続くが、ほとんどがバンクーバー在住者によるものであった。このようにBC州全体では上位にないものの、バンクーバーで庭園業に就く日本人ガーディナーは5位の173名を数えた。他地域ではフレザー川流域の3名やバンクーバー島の2名がみられるが、ガーディナーは都市域に特徴的にみられる生業であった。

BC Directory と『在加奈陀邦人名録』を精査すると、1941年当時のバンクーバーでは173人がガーディナーに就いていた。最多は鳥取県出身者で、それは全体の18%となる26人であった。カナダで日本人最多となる滋賀県出身者に比べると、鳥取県出身者はガーディナーを選ぶことが多かったようである。

弓ヶ浜半島を中心とする鳥取県出身者はカナダで200世帯を数え、そのうち199世帯がBC州、さらに88世帯がバンクーバーに住んでいた。BC Directoryによると、そのうち約3分の1を占める30名がガーディナーを生業としていた。それに次いで漁業に14名、製材業に8名が就いている(第3表)。つまり、戦前のカナダ日本人移民の代表的な生業に対して、鳥取県出身者の就業構造は大きく異なるのである。

前述した『鳥取懸人同志會畧史』には、1939年ごろにガーディナーに就いていた11名が記されている。そのなかには協会の第1期会員で、後に第5代会長になった村田芳の名前がみられる。それ

第2表 カナダにおける日本人のおもな職業 (1938年)

	バンクーバー	ステューブストン	フレザー川沿岸	バンクーバー島	西部	中部	合計
漁業	④ 200	① 321	④ 147	③ 193	② 219	⑤ 4	② 1,084
農業	⑨ 6	④ 49	① 481	⑤ 35	⑤ 6	① 201	④ 778
伐木業	⑨ 6	⑥ 2	⑤ 92	① 412	④ 120	③ 6	⑥ 638
製材業	③ 386	0	③ 154	② 266	⑤ 6	⑥ 1	③ 813
製紙業	0	0	0	0	① 353	0	⑦ 353
商業	② 568	③ 53	⑥ 29	⑥ 25	⑤ 15	④ 5	⑤ 695
うち輸出入業・卸業	13	—	—	—	—	—	13
うち小売業	266	—	—	—	—	—	266
うち商店員	289	—	—	—	—	—	289
先染・裁縫・洗濯業	⑥ 172	⑤ 12	⑦ 3	⑦ 20	⑦ 4	0	⑧ 211
庭園業	⑤ 173	0	⑦ 3	2	0	0	⑨ 178
旅館業	⑦ 114	⑦ 1	⑨ 2	⑩ 3	⑧ 3	0	⑩ 123
会社・官庁・新聞	⑧ 105	0	0	⑧ 6	0	⑥ 1	112
一般労働	① 585	② 186	② 271	④ 126	③ 141	② 119	① 1,428
不明・失業	428	0	0	⑨ 4	⑨ 3	0	435
合計	2,743	624	1,182	1,092	870	337	6,848

注1) 100人以上の就業がある職業のみ

注2) ①~⑩は就業者数の順位

在米日本人会事蹟保存部編纂『在米日本人史』、在位米日本人会、1940、1042-1043頁。より作成

第3表 鳥取・高知県出身者の居住地と職業 (1941)

鳥取県出身者		高知県出身者	
全カナダ	: 200 世帯	全カナダ	: 87 世帯
うち BC 州	: 199 世帯 (99.5%)	うち BC 州	: 83 世帯 (95.4%)
うちバンクーバー	: 88 世帯 (44.2%)	うちバンクーバー	: 29 世帯 (34.9%)
うち職業判明者	: 74 人	うち職業判明者	: 16 人
ガーディナー	30	ガーディナー	7
漁業	14	製材業	3
製材業	8	店員・セールスマン	3
ルーミングス	2	マスコミ	1
請負業	2	大工	1
店員・セールスマン	2	不明	1
魚類卸売業	1		
輸出業	1		
菓子店	1		
クリーニング店	1		
洋裁業	1		
雑貨店	1		
機械工	1		
ハウスワーク	1		
マスコミ	1		
タクシー業	1		
柔道師範	1		
不明	5		
メイン島 (養鶏業・農業)	17	ニューウエストminster (製材)	11
イーバン (漁業)	10	シュメイナス (製材)	9
ミッション (農業)	10	スティーブストン (漁業)	4
ポートアリス (製紙)	8		
ポートアルバーニ (製材)	7		

B.C.Directory, 1941、大陸日報社編『在加奈陀邦人々名録』、1941 より作成

よりも重要なのは、すでに彼らは 1600 ~ 1900 番地・West 1 ~ 7th.、つまりキツラノ地区に集住していたことである。

日本人最大の居住区であるパウエル地区や、日本人漁業者が集住したスティーブストンではなく、日本人ガーディナーはフレザー・クリーク南岸のキツラノ地区やフェアビュー地区に居住することが多かった。その地理的要因は、両地区に南接するショーネシー地区をはじめ、後背地には芝刈りや落ち葉拾いを日本人に任せる上層のカナダ人宅が展開していたからである⁴⁶⁾。また、当時のキツラノ地区はバンクーバーの縁辺部にあたり、その後背地では住宅開発が進展し、顧客が次々に生まれていたのである⁴⁷⁾。したがって、バンクーバーの港湾地域にあたるパウエル街や、フレザー川河口にキャナリーが連立するスティーブストン周辺は、ガーディナーにとっては必ずしも良好な環境ではなかったのである。

1941 年当時、キツラノ地区には 100 世帯の日本人が居住していた (第 4 表)。世帯主を出身県別にみると、最多は 36 名の滋賀県出身者で、29 名の鳥取県出身者がそれに続き、両県出身者で過半数を占めていた。前者については 12 名が製材業に従事し、ガーディナーは 7 人である。それに対し、後

者の鳥取県出身者の半数の15名がガーディナーである。他県については、岡山・福島・鹿児島県出身者は各2名、和歌山・新潟・広島・福岡県では各1名がガーディナーとして活動していた。ガーディナーの総数は36名を数え、製材業の23名⁴⁸⁾を上回っていた。つまり、キツラノ地区は鳥取県出身者を中心とするガーディナーの集住区であった。

BC Directory と火災保険図からキツラノ地区の1ブロック(約100m四方)について詳細にみると、鳥取県出身者の経営するアパートに同郷者が部屋を借りている様子が見とれる(第5表・第4図)。その中心は角芳松・博愛で、キツラノ地区で多くのガーディナーを世話している。なお、角知道の妻は、*BC Directory* に記されたその名前から矢倉長寿の娘と判明する。つまり、血縁・地縁関係から、角・矢倉家をはじめとする弓ヶ浜半島出身者がキツラノ地区における日本人ガーディナーの中心を形成していたのである。

第4表 1941年におけるキツラノ地区の日本人の出身地と職業

職業	鳥取	滋賀	岡山	福島	鹿児島	和歌山	熊本	その他	合計
ガーディナー	15	7	2	2	2	1		7	36
製材業	5	12	1	1			1	3	23
商店経営	4	4						3	11
ルーミングス	1								1
店員		1					1		2
職工		5						1	6
鉄道工夫		1							1
農業		1							1
運転手							1		1
漁業						1			1
教員								1	1
無職・未亡人	4	5						7	16
合計	29	36	3	3	2	2	3	22	100

BC Directory, 1941、大陸日報社刊『在加奈陀邦人々名録』、1941より作成

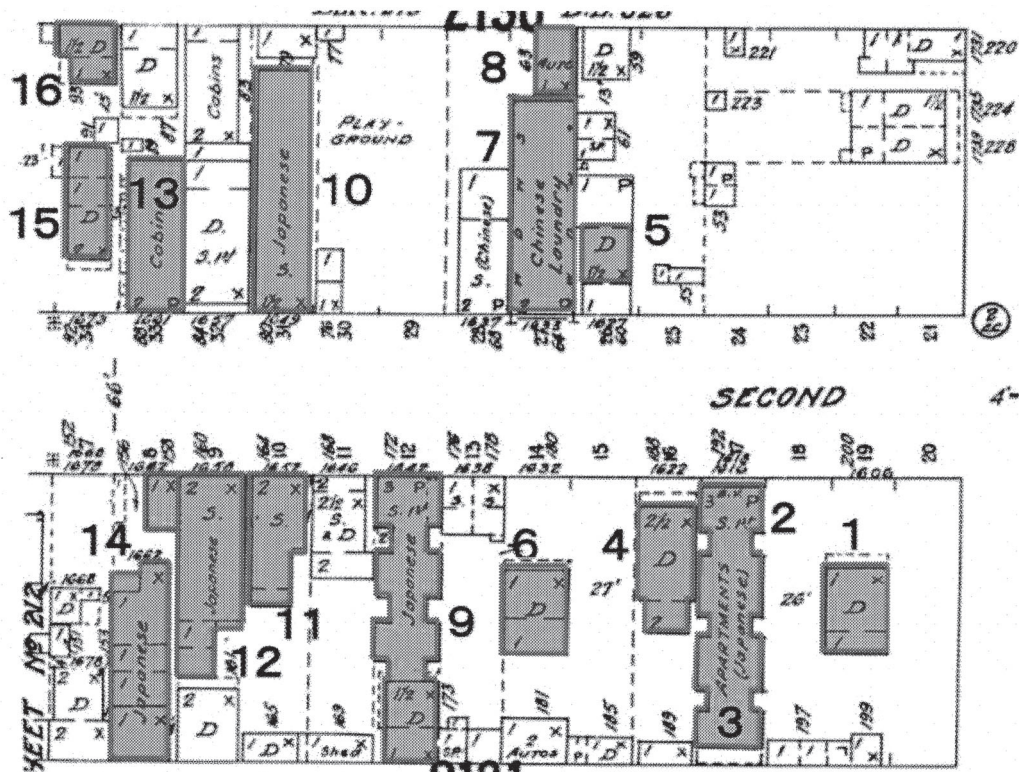
なお、『北米年鑑』には、当時のバンクーバーにあった各種団体のうち、ガーディナー関係では唯一のものとしてキツラノ地区北部の2345 West 8th. Av. (西8番街2345番)のYamamoto Ryoussuke宅に「ガーデン研究会」の記載がある⁴⁹⁾。『宇佐町誌』の「町外在住者」にある「山本良作:英領カナダビーシー州バンクーバー市西八街二三四五番地」という記録⁵⁰⁾から、両者は同一人物であろう。そして、同地には山本省之助、味元虎巢と久保貞三郎の同郷者が同居していた。つまり、キツラノ地区では、鳥取県とともに高知県出身者もガーディナーとして活躍していたのである(第3表)⁵¹⁾。

第5表 キツラノ地区（一部）における日本人の職業と出身地の詳細（1941）

No,	住所	居住者	配偶者	職業	出身地
1	1616 W. 2nd, Av.	角 芳松	Matsu	ガーディナー	鳥取県
2	1616 2nd, Av.	田中 為蔵	Fujie	製材業	滋賀県
		蔵原 Suetoshi	Taeko	運転手	熊本県
		KITASKA	—	ガーディナー	不明
		川田 省三	—	ガーディナー	鳥取県
		佐賀 清重	—	ガーディナー	鳥取県
		梅本 四郎	—	販売員	滋賀県
3	1618 2nd, Av	八木 國末	—	ガーディナー	鹿児島県
		KIMURA	—	ガーディナー	不明
4	1622 W. 2nd, Av.	尾本 子之助	Mitsuko	ガーディナー	滋賀県
5	1627 W. 2nd, Av.	Mrs. TATSUMI		未亡人	不明
6	1632 W. 2nd, Av.	坂口 三次郎	—	ガーディナー	不明
7	1633 W. 2nd Av.	辻市 太郎	—	雑貨店経営	兵庫県
		松林 利平治	—	製材業	滋賀県
8	1635 W. 2nd, Av.	足立 勝榮	Yuke	ガーディナー	鳥取県
		足立 Yshio	—	ガーディナー	鳥取県
		足立 Kitsua JR.	—	ガーディナー	鳥取県
9	1642 W. 2nd, Av.	角 利顕	Oiso	雑貨店経営	鳥取県西伯郡和田村
		渡邊 敏博	—	製材業	鳥取県西伯郡和田村
		渡邊 財得	—	製材業	鳥取県西伯郡和田村
		角 博愛	—	下宿業経営	鳥取県西伯郡中濱村小篠津
		武良 Tadao	—	ガーディナー	鳥取県
10	1649 W. 2nd, Av.	木村 政次郎	Katsuko	製菓業	滋賀県
11	1652 W. 2nd, Av.	尾本 勇太郎	Kath	製材業	滋賀県
		武良 國榮	Tsokumia	ガーディナー	鳥取県
12	1658 W. 2nd, Av.	西村 初太郎	Aiko	雑貨店経営	滋賀県
		竹中 捨吉	Kato	製材業	滋賀県
		足立 要二	Yozi	製材業	鳥取県
13	1661 W. 2nd, Av.	大林 房次郎	—	—	滋賀県
		大本木 TOYO	—	理髪業	滋賀県
14	1662 W. 2nd, Av.	村上 初太郎	—	製材業	熊本県
15	1673 W. 2nd, Av.	西崎 武夫	Isino	製材業	岡山県
		西崎 武三郎	—	製材業	岡山県
16	1673 W. 2nd, Av.	赤田 新太郎	—	製材業	滋賀県
		若林 Toku	—	製材業	滋賀県

※番号は第4図と対応。トーンは鳥取県出身者

BC Directory, 1941
大陸日報社刊『在加奈陀邦人々名録』、1941より作成



第4図 火災保険図にみるキツラノ地区（一部）

※番号は第5表と対応
Fire Insurance Plan ならびに第5表と同資料より作成

V. 門永島の日本庭園—おわりにかえて—

前掲の第4表をみると、17人（世帯）の鳥取県出身者がメイン島に居住していた。バンクーバー沖のジョージア海峡に浮かぶ約20km²のこの小島にも、鳥取県出身者は活躍の場を求めた。かつて療養所があり、その健康食としてトマトが栽培されていた当島で、彼らはこの栽培と養鶏業を生業とし、バンクーバーへ出荷していた。彼らの先駆者が上道村出身の門永権太郎であったことから、このメイン島は門永島、あるいはゴン・アイランドと呼ばれた⁵²⁾。

2002年、メイン島ライオンズクラブを中心に、戦前における日本人の活躍を偲んで日本庭園が築かれた⁵³⁾。「平安」と書かれた鳥居をくぐると、そこには日本庭園が広がる（第5図）。門永島での日本人の活動は別稿に改めるとともに、今後の課題をあげたい。



第5図 メイン島の日本庭園
2012年 河原撮影

まずは、日本人が渡加した 20 世紀初頭のバンクーバーにおけるガーディナーの実態を明らかにしたい。先に同業に就いていた中国人との関わりや白人宅での諸作業について、カナダ政府の史料⁵⁴⁾から検討する。なによりも、先行研究で明らかにされなかった戦後にガーディナーを選択した和歌山県出身者をはじめとする帰加二世と、先駆者としての鳥取出身者との関係を解かねばならない。さらに、戦後の新移住者による各機器の導入や、それともなう労働形態の変化、そして彼らの居住地や顧客圏の変化などの考察によって、庭園業から造園業へと発展してきた日本人ガーディナーの展開⁵⁵⁾を明らかにしたい。カナダ日本人移民史が看過してきたこのテーマには、新たな課題は少なくないのである。

付記

本稿の執筆にあたり、貴重な資料をご提供いただいた鳥取県境港市教育委員会の皆様方に心からお礼申しあげます。また、2012年に境港市主催「北米移住 120 周年事業」と日本移民学会ワークショップ、2018年に米子市美術館主催のシンポジウム「海を越えてカナダと繋がる山陰地方の歴史と風土を巡って」で講演させていただいたことに感謝いたします。また、バンクーバー日系ガーディナーズ協会、UBC 新渡戸庭園やカナダ日系博物館などの方々に深謝いたします。

本稿は、バンクーバー日系ガーディナーズ協会の年報“*Roster (2013 年版)*”に寄稿した小文をもとに、その後の調査資料を加えて大幅に加筆・修正したものです。2009～2018年の*Roster*へ10年間にわたって、寄稿をお勧めいただいた協会の皆さまにお礼申し上げます。

本稿は、2020～2024年度基盤研究(C)「バンクーバー大都市圏の日本人ガーディナー：技術革新にともなう庭園・造園業の展開」(代表・河原典史)の成果の一部です。

注

- 1) ①柳田由紀子(2006)『太平洋を渡った日本建築』、NTT出版。②片平幸(2014)『日本庭園像の形成』、思文閣。
- 2) 河原典史(2012)「ビクトリアの球戯とバンクーバーの達磨落とし—20世紀初頭のカナダにおける日本庭園の模索—」、マイグレーション研究会編『エスニシティを問いなおす—理論と変容—』、関西大学出版会、249-265。
- 3) 河原典史(2012)「カナダにおける日系ガーディナーの先駆者たち(4)—「花嫁の滝」を築いた古賀大吉—」、*The Year of 2012 Membership Roster*、23-29。
- 4) ビクトリアでは漁閑期における日本人によるラッコ漁の従事者、ボーウェン島では古賀の同郷者や、漁業ライセンスの未取得によって拿捕された日本人が造園を担った。ビクトリアについては不明な点が多く、海獣漁の関わりから今後の課題としたい。
- 5) 1933年10月15日にビクトリアで客死した新渡戸稲造を悼んで、12月15日に顧問を日本領事の石井康とした新渡戸記念事業委員会が組織された。委員会には日加貿易に関わる日本人社会の重鎮の他、新渡戸を診察した鹿児島県揖宿郡指宿村(現・指宿市)出身の医師・下高原幸蔵も名を連ねている。委員会はバンクーバーのスタンレー公園に日本庭園を造り、そこへ石灯籠の設置を計画した。石灯籠は、大阪市此花区西九条の合名会社・一栄商会で製造された。紆余曲折の結果、UBC構内での日本庭園の造園が決まった。①河原典史(2016)「バンクーバーにおける幻の新渡戸庭園—太平洋を渡った石灯籠—」、民俗建築149、31-39。②河原典史(2017)「幻の新渡戸庭園を造った人びと—忘れられたバンクーバーの日本庭園史—」、森隆男教授退職記念論考集刊行会編『住まいと人の文化』、三協社、15-33。
- 6) 1959年、UBCに新渡戸庭園の再建が計画された。「本格的な日本庭園」の造園のため、日本から「専門の造園家」として千葉大学園芸学部教授・森勘之助が招聘された。造園にあたってUBC内で採取された石材が活用されたほか、フレーザー川中流部に位置するチリワックの小石や、バンクーバー北方のブリタ

- ニア・ビーチの赤石も水路に使用された。一方で、グレーター・バンクーバー日系市民協会会長の石原 G. 暁は、さまざまな日系団体に造園費の援助を呼びかけた。G. 暁の父・明之助は、戦前の日本人社会で活躍した医師・薬剤師である。完成翌年の 1961 年には、明治神宮からの株分けによって菖蒲園が設置された。ただし 1992 年の改修には、太平洋の架け橋であることを願った新渡戸の哲学をめぐって多様な意見がある。河原典史 (2018) 「新渡戸庭園の造園とバンクーバー日本人社会の諸相—日本人ガーディナーの活躍—」、河原典史・木下昭編『移民が紡ぐ日本—交錯する文化のはざま—』、文理閣、80-102。
- 7) 新・新渡戸庭園に関する造園学や博物館学からの報告は、以下を参照。① Neill, W, J. (1970) *Nitobe Memorial Garden: History and Development, Davidsonia 1-2*, 10-15. 本号は新渡戸庭園特集であり、Mackenzie, A, M, N. Dr. Inazo Nitobe 1862-1933, 9. をはじめ、Map of Garden : Selected Plant List, 16-17. などが収められた解説書となっている。②小寺駿吉 (1960) 「森勘之助氏逝去」、造園雑誌 24-2、47。③浅野二郎 (1996) 『森勘之助—造園文化による国際文化交流の先駆者—』、ランドスケープ研究 59-4、243-246。④吉見かおる (2014) 「われ太平洋の橋とならん—新渡戸記念庭園—」、北米エスニシティ研究会編『北米の小さな博物館 3—「知」の世界遺産—』、彩流社、272-281。
- 8) 本稿では、ほとんどが庭園業の従事者であるものの、必ずしも区別が付かないので「ガーディナー」とする。
- 9) ①新保満 (1985) 『カナダ移民排斥史—日本の漁業移民—』、未来社。②新保満 (1986) 『カナダ日本人移民物語』、築地書館。③新保満 (1996) 『石をもて追われるごとく—日系カナダ人社会史—』、御茶の水書房。など。
- 10) 佐々木敏二 (1999) 『日本人カナダ移民史』、不二出版。
- 11) ①吉田龍一編 (1926) 『加奈陀在留邦人々名録』、1-173、佐々木敏二編 (2000) 『カナダ移民史資料 第 6 巻』、不二出版。②大陸日報社刊 (1941) 『在加奈陀邦人々名録』、1-204、佐々木敏二編 (2000) 『カナダ移民史資料 第 6 巻』、不二出版。
- 12) 大陸日報社刊 (1931) 『ビーシー州日本人電話帳』、1-55、佐々木敏二編 (2000) 『カナダ移民史資料 第 6 巻』、不二出版。
- 13) 前掲 10)
- 14) 末永國紀 (2010) 『日系カナダ移民の社会史—太平洋を渡った近江商人の末裔たち—』、ミネルヴァ書房。
- 15) 筆者は Debit (帳簿) や Check (小切手) を活用して、サケ缶詰工場に従事する日本人の実態を明らかにした。①河原典史 (2009) 「Returns (報告書) と Debits (個人別帳簿) にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」、立命館言語文化研究 20 (4)、81-86。②河原典史 (2017) 「サケを運んだ薩摩人—カナダのサケ缶詰工場における日本人移民史—」、立命館文学 650、123-138。
- 16) 蒲生正男 (1962) 『海を渡った日本の村』、中央公論社。
- 17) 山田千香子 (2000) 『カナダ日系社会の文化変容—海を渡った日本の村三世代の変遷—』、御茶の水書房。
- 18) なお、カナダにおける日本人移民に関する報告があるものの、漁業・製材業などの代表的な業種についての記述が多く、ガーディナーについてはほとんど触れられていない。その傾向は、著者が Gordon G. Nakayama、Ken ADACHI などの日系カナダ人の場合でも同様である。Nakayama, G, G. (1984) *Issei: Stories of Japanese Canadian Pioneers*, NC Press. Adachi, K. (1991) *The Enemy That Never Was: A History of the Japanese Canadians Toronto*, McClelland and Stewart Inc.
- 19) この資料の書誌情報や、その地理学的活用方法については以下の拙稿を参照。河原典史 (2014) 「カナダ日本人移民史研究における住所氏名録と火災保険図の歴史地理学的活用—ライフヒストリー研究への試的アプローチ—」、移民研究年報 20、17-37。
- 20) 大縮尺図であるこの資料についても、前掲 19) を参照。
- 21) 前掲 11) - ①
- 22) 前掲 11) - ②
- 23) 中山訊四郎編 (1922) 『加奈陀同胞発展大鑑 附録 (同胞人物観)』、佐々木敏二編 (1995) 『カナダ移民史資料 第 2 巻』、不二出版、佐々木敏二編 (1995) 『カナダ移民資料 第 3 巻』、不二出版。
- 24) 大陸日報社編 (1924) 『加奈陀同胞発展史 第三』、佐々木敏二編 (1995) 『カナダ移民資料 第 1 巻』、不二出版。

- 25) ①河原典史 (2014) 「カナダ・ロジャーズ峠における雪崩災害と日本人労働者—忘れられたカナダ日本人移民史—」、吉越昭久編『災害の地理学』、文理閣、193-210。②河原典史 (2016) 「1910年の悲劇はいかに報道されたか—カナダ・ロジャーズ峠の雪崩災害と日本人移民社会—」、河原典史・日比嘉高編『メディア—移民をつなぐ、移民がつなぐ—』、クロスカルチャー出版、131-156。
- 26) 小山富見男 (2011) 『満蒙開拓と鳥取県—大陸への遙かなる夢—』、鳥取県史ブックレット7、鳥取県総務部総務課県史編さん室編、鳥取県。
- 27) 鳥取県 (2008) 『鳥取県中南米移住史』、鳥取県、124-136。
- 28) 西尾愛治 (1974) 『海外で活躍する鳥取県出身者 (その2) —カナダ製材労働界の大ボス 門田勘太郎氏一代記—』。
- 29) 境港市編 (1986) 『境港市史 下巻』、境港市。
- 30) 前掲 29)
- 31) 門永文吾 (1982) 『CANADA 渡航記—郷土鳥取県人のあゆみ—』。
- 32) 前掲 31)
- 33) 上道共同墓地に建立されている足立夫婦の碑文によれば、儀代松は志なかばで帰国し、1920 (大正9) 年4月29日に故郷で亡くなったという。なお、境港市にはカナダを中心とする北米移住に関する金石文が多くある。この詳細については、今後の課題である。
- 34) サケ缶詰産業ではイギリス系カナダ人が経営者となり、その労働力としてファーストネーション、中国人と日本人による分業体制がとられていた。缶詰工場や倉庫、網干場の他、彼らには住居が与えられていた。それらの付属設備も含めた設備は、キャナリー (cannery) と呼ばれる。
- 35) セルチック・キャナリーの開設年や、鳥取県出身者を中心とする従事者については今後に別稿を改めた。
- 36) 河原典史 (2013) 「『前川家コレクション』—バンクーバー島西岸の漁業開拓者たち」、河原典史編『カナダ日本人漁業移民の見た風景—前川家「古写真」コレクション—』、三人社。フレーザー川南流の支流・カナ水路にあるブランスウィック・キャナリーにおいても和歌山県出身者はみられず、ほとんどが鹿児島県南西部出身者であった。前掲 15) - ②
- 37) 遠藤敬事編 (1939) 『鳥取懸人同志會畧史』。
- 38) この期間、三尾出身者を中心とする漁業者はバンクーバー島東岸におけるニシン漁に従事する者も少なくなかった。河原典史 (2016) 「20世紀初頭のカナダ西岸における塩ニシン製造業の歴史地理学的検討—是永・嘉祥家を中心に—」、立命館文学 645, 370-353。当時の塩ニシン製造業は日本人による独占的な産業であり、日本を経由して朝鮮や台湾へも輸出されていた。河原典史 (2015) 「太平洋をめぐるニシンと日本人—第二次大戦以前におけるカナダ西岸の塩ニシン製造業—」、米山裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界—日系移民の近現代史—』、文理閣、146-162。また、鉄道現場の除雪作業に携わる者もいた。前掲 25)
- 39) 前掲 9)。
- 40) 滋賀県出身者は製材業 (sawmill)、熊本県出身者は山地 (ヤマ) で炭鉱夫や鉄道保線工、それらで事故死するよりは鯀 (herring) やサケの漁獲に携わる方がまだよいという、和歌山県出身者による俗言である。河原典史 (2018) 「カナダへの移民」、日本移民学会編『日本人と海外移住—移民の歴史・現状・展望—』、明石書店、99-117。
- 41) これは、庭を掃く「箒」と鳥取県西部の旧国名「伯耆」とを掛けた筆者の造語である。
- 42) 角の経歴については、バンクーバー日系ガーディナーズ協会の資料や関係者からの聞き取り調査のほか、以下による。① Sumi, E and Shimokura, H. (2015) *Roy Tomomichi Sumi: Renowned Designer and Architect of Japanese Gardens*, Nikkei Images 20-3, 16-19. ② Sumi, E. (2010) *Family of Roy Tomomichi Sumi*, Mori, E. and Ontario Tottorikenjinkai (2010) *Tracing Our Heritage to Tottori Ken Japan*, Nikkei National Museum, 240-249.
- 43) ニューデンバーには日本人の収容に関わる博物館と、それに隣接して戦後に角が造園した日本庭園がある。なお、筆者は収容所時代のカラー 8mm フィルムを譲与され、その保存と分析を試みている。
- 44) 10代の頃から詠んでいた俳句も教えた彼は、角加竹のペンネームで日本語新聞『ニュー・カナディアン』

に俳句を投稿していたという。詳細は今後の課題である。

- 45) 叙勲を記念した「瑞宝園」がスカイトレインのニューウェストミンスター駅に造園されたが、現在では取りこわされている。
- 46) Macdonald, B. (1992) *Vancouver: A Visual History*, Talon Books, 30-41.
- 47) 先述した 1935 年の旧・新渡戸庭園の造園時、*BC Directory* にみるバンクーバーの日本人ガーディナーは 36 人であった。彼らの出身地をみると、最も多いのは 8 名を数える滋賀県である。そして、鳥取県 (6 名)、福島県 (4 名) と福岡・熊本県 (各 3 名) が続く。彼らの居住地は、三番街とも呼ばれていたフェアビュー地区とともにキツラノ地区であるが、その数は必ずしも多くない。つまり、都市域の拡大により、新たな日本人集住地が西方に形成されたのである。
- 48) 彼らはパウエル街近隣の製材所ではなく、キツラノ地区に隣接するフレージャー運河に立地する R&H Sawmill, Ceder Cove S&D, Sitka Spruce や Cartwright Lumb などの製材所に勤めた。The ABC Lumber Trade Directory and Year Book, 1939. なお、バンクーバーの製材所には滋賀県出身者が多く勤めたのに対し、遠方では他県出身者の占める割合が大きかった。バンクーバー島中部のアルバーニやアメリカ国境に近いホワイトロックで活躍したのは福井県出身者であった。カナリーと同様、製材業においても渡加時期とその後の居住地との関係性、すなわち後発の日本人は遠方の製材所に就かざるをえなかったようである。この点は今後の課題としたい。
- 49) 北米時事社編 (1936) 『北米年鑑』、北米時事社。
- 50) 山本信光編 (1937) 『宇佐町誌』、宇佐保勝会。
- 51) 河原典史 (2006) 「カナダ日系ガーディナーの先駆者—高知県宇佐の山本省之助・半次兄弟—」、土佐地域文化 10、177-184。
- 52) 前掲 31)
- 53) Spalding, A.E. D. (2007) *Enchanted Isles: The Southern Gulf islands*, Harbor Publishing.
- 54) 調査項目のひとつに“gardener”がある。Canada. Royal Commission on Chinese (1902) *Immigration Report of the Royal Commission on Chinese and Japanese Immigration: Session 1902*, S.E. Dawson.
- 55) 河原典史 (2014) 「新渡戸庭園の造園とバンクーバー日系ガーディナーズ協会の創立—協会創立期の日系社会—」、55th. Anniversary, Vancouver Japanese Gardeners' Association、92-97。

(本学文学部教授)

The Development of Japanese Gardeners at Vancouver City in Canada before the World War II :
The Key Persons from Western Tottori Prefecture in Japan

by
Norifumi Kawahara

A purpose of this article is to clarify development of Japanese gardeners Vancouver city in Canada before the World War II.

On 1938, there were 173 Japanese gardeners in Vancouver city. There were 5 gardener in the Fraser river basin and Vancouver Island. In Vancouver city, Japanese gardeners showed the fourth place following general labors, merchants, lumbermen and fishermen. There were 144 gardeners in Vancouver city on 1941. The most emigration was from Yumigahama peninsula in the western Tottori prefecture, they were 26 persons.

Sakaiminato town located in the peninsula. In the early modern times, that port town prospered in the shipping trade. The peninsula became a sandbar, the rice field cultivation was not necessarily brisk. When it was modern times, raw cotton came to be cultivated. However, the farming family made poverty when cheap raw cotton came to be imported.

And so, Ryu Murakami of the school teacher was born in Agarimichi village advised and helped young men to go to foreign countries. One of the youths affected by Murakami was Giyomatsu Adachi. Adachi who resigned a teacher went over to Vancouver city in 1892. For three years, he stayed in Canada. After returning to hometown, he preached travel to Canada. And the immigration of 14 persons who assumed Adachi and a vice-leader Keitaro Kawajiri was formed, and the grouped went to Canada in 1895.

Most of persons from western Tottori prefecture lived in the Kitsilano district at southern coast of the Fraser creek in Vancouver. Many upper class Canadians live at the hinterland of that that district. They became some customers of Japanese gardeners cut grasses and took the removal of fallen leaves and moss in the in the following spring from autumn. Here was Japanese community of gardeners from western Tottori prefecture. Especially, Tomomichi Sumi was the pioneer of Japanese gardeners.